米国における能楽研究の実態と
私の能狂言を中心とした演出活動（4）
―一九六〇年代から20世紀の終わりまで―

アンドリュー T・椿

I. 日本古典演劇の実際を勉強する

A. 一九六九年の夏

始めてみると、あれこれ注意書きが多くなり、序論が長くなりましたが、ここでやっと本論にはいることになります。第七号に乗った第一稿の最後で、私が、一九六九年の夏に狂言を勉強したことに一寸触れていますが、キャンザス大学の任期が二年目にはいる前に、本格的なアシスタント・プロフェサーとして任命をいただき、私の将来が保証されるという条件も整い、日本を出国以来十一年にして、始めて帰国するということになりました。身一つで出た私が、今度は、ワイフと幼い子供を二人連れて、八週間帰ることになりました。帰ってみると、ちょっとした今浦島で、

なじみの深い新宿の紀伊国屋の前に立っていて、新しい高層建築の紀伊国屋が目に留まらず、通りがかりの人に、「紀伊国屋はどこですか?」と聞いて、やっとそれを確認したり、新宿駅の西口に出て、その巨大な駅前の様子に圧倒されたのを覚えています。六四年の東京オリンピックで、東京がこんなにも変わってしまったと言うことを、自分の目で確かめたわけです。

その同じ第一稿で、私が野村万作師に親しみを覚えたことを書きましたが、この私の第一回の、日本古典演劇の実際についての勉強が、思った以上の好結果をもって終わったのも、全く彼の適切な助言があってのことであったことを述べて、今までの、いろいろな暖かい心づくしをいただいたことに感謝する、私のささやかなお礼心の表現とさせていただきます。八週間の滞在を二つに分けた形になりましたが、最初の四週間は、友人親戚廻りに追われ、特に家内の両親の出身地になる、福井県の鯖江にも出かけ、私にとって始めての、裏日本訪問と言うこともあり、色々あちこち連れられて歩きました。最後の四週間で、歌舞伎、能、狂言と三つの演劇に取り組んだのですが、今考えても、良くあれだけできた、又教えてくださった方々が、良く我慢をしてくださって、手取足取り的に、私の世話をしてくださったものと、感謝しています。

万作師の紹介で、歌舞伎は中村又五郎師、能は万作師の弟になる、野村四郎師から、そして、狂言は当然万作師から教わることになりました。丁度夏のことで、又五郎師が暇であったと言うこともあり、毎朝のように、中央線の四谷駅で下り、六番町のご自宅に通って、歌舞伎の「勧進帳」を初めから終わりまで、その動きから、セリフの調子まで、事細やかに教えていただきました。勿論テープにセリフの調子などは取り、動きは八ミリの映画にとらせて貰いました。後で気が付いたのですが、こうして一対一で教えていただくと、良いことはたくさんありますが、グループの動きをはっきりつかむことは難しいということです。このことは、又後で、考察いたします。

狂言は、万蔵師のご自宅の後ろになる、よろず舞台、西部池袋線の椎名町で下り、南長崎の住宅街のなかにある稽

古場に通いました。ここで四週間の午後、大部分の時間を万作師と過ごし、「附子」、「鎌腹」、「鈍太郎」の動き、セリフを勉強しましたが，その狂言的な演劇感を育てるために、小舞いの勉強もして、「兎」、「花の袖」は、後で、大学の日本古典演劇のクラスや、その他の講習会などで、盛んに利用させていただきました。能や狂言の基礎的な動きや謡の感じを掴ませるのに、大変有効でした。

能の方は、忙しい四郎師を煩わし、出きるだけの時間を割いていただいて、やはりよろず舞台で、週に何回か、「船弁慶」の勉強をしました。それでもひととおり、その動き、謡や、セリフ廻しの勉強を済ませ、クセの静の舞とその謡い、後仕手の平知盛の動き、長刀の使い方なども、カメラとカセットに納めました。

後で考えると、この三人の師になる方々が、良く私の希望を受け入れてくださり、全然基礎的な勉強もしていない私の希望を入れてくださって、これだけの時間を割いて、細かく教えてくださったと感謝するのみです。時間的に言って、私がこのように決心して日本に出てきて、今後こうしたことを舞台に乗せて、日本の古典演劇を紹介するのだと言う、私の意気込みに賛同してくださったおかげかと思います。「お前にこんな難しいことが出きるか？」などといわれたことはありませんでした。又、これを勉強するためには、その前に、これとこれとを勉強しなければならないと言ったような、そういう普通なら許されないであろうと思われることも、強いられず、特別考慮をしていただきました。時間のないのを良く承知してくださり、テープやカメラも使わしてくださり、そのお陰で、私は家に帰ってから、何度も何度もテープを聞き返し、映画を見直して、ノートを取り、何をするのか確かめて、その情報を教室や、稽古場に持っていったものです。時期的に、そうしたことをする人が未だ余りなく、日本人としては、イリノイ大学の、佐藤昌三以外、私が初めてだったと思います。佐藤の場合は、日本で既に、出発前に東宝の養成課を出ていて、それなりの訓練をしていたわけです。私の方は、世阿弥の幽玄について、博士論文を書いたりした後で、こうした実技的なものに挑戦したわけです。良くあれだけ頑張れた、今考えると、全く夢のようです。幼子を二人抱えて、夫の

実家で毎日出かけてしまって、忙しくしている夫の立場を、文句も言わずに立ててくれた家内の辛抱にも感謝しなければなりません。

この時は、私も学者として未だうぶで、どの様に援助金に応募して、そうした資金にたよって研究すると言う方法を知らず、幸い、オハイオで四年間教え、積み上げた退職金を返して貰ったので、その資金を利用して、一家で日本に八週間過ごし、三人の、一流の方たちに教えていただき、恐らく十分ではないお礼金を払って、勉強したわけですから、今考えれば、冷や汗ものです。

こうして勉強させて貰った能、狂言、歌舞伎の作品のなかで、結局、能の「船弁慶」のみは、ついに舞台に乗せることはありませんでしたが、そのクセの静の舞と知盛のキリの働きは、クラスで教えたり、私が講演の時に、実演したりして、何百回と利用させてもらいました。狂言の三曲は、一九七〇年の四月、大学の実験劇場で、十回の公演をしました。これが私の日本古典演劇上演の第一弾になったわけです。歌舞伎の「勧進帳」は、一九七三年の四月に、五回、大学の大劇場で公演しました。

B．研究結果の発表

1．一九七〇年の狂言

一九六八年に、オハイオの前任校で、野村家の狂言を招待することができ、それを見ることによって私の人生の方向が決まった事は、既に申し上げましたが、その狂言団が、このキャンザス大学にも寄っていて、一部の人にとって、私が演出した狂言のプログラムは、始めてではなかったわけですが、六八年には、たった一晩のことで、私の方の狂言は、十回の公演ということもあり、もっと目的を徹底させる事ができたと思います。六八年に私が外国で見た狂言は、この演劇形態は、こちらの人にも十分楽しんでもらえるということを教えてくれました。それが一つの大事な動

機ですが、この狂言プログラムを企画した大事な目的は、今日の西洋の演技は、演出家や演技者が自由な解釈を是とし、様式に縛られることを嫌い、様式を重んずる演劇形態を全く知らないと言う状態でいることに、挑戦しようというものです。そういう様式美などを知らない学生達に、日本の古典演劇のもっている様式美を経験させ、それを分からせ、新しい演技の次元を経験させるということが、私の大きな課題になった次第です。

このことを予定して、一九六九年の秋学期に、Styles of Acting: Classical Japanese（日本古典演劇演技様式）といったコースを作って、ここの学生に教えてみました。この経験は一九七〇年の春に、狂言を上演することになる布石として、大変大事なことでした。このコースでは、十五週間の一学期中に、その二週間を割いて、日本演劇史を駆け足で通り、後は、能、狂言、歌舞伎と大体三つの演技形態に同じような時間を割いて勉強させました。実技が主ですから、古典演技のための姿勢、歩き方、発声、謡い、動きなど、狂言の小舞を使い、能の謡い、舞、働き（「船弁慶」を使って）を教え、狂言では、「附子」を使って、動き、セリフ廻し、手振り身振り、演技などを勉強させ、歌舞伎では、「勧進帳」の弁慶の動き、見得、六法、舞、セリフ廻し、長唄も唄わせ、色々比較をしたり、一つ一つの特徴を経験させ、その違いを、身体で分からせると言うこともしました。私の心づもりでは、こうして一応古典演技様式を勉強した者が、春の公演のために応募してくると思ったのですが、全部が全部そうしたわけではなく、春になって、新しく参加する者もあって、この希望的な計画は、思い道理には行きませんでした。然し後ではこのこともあって、このコースは、上演する劇を準備する学期に、教えるようにして、両者の関連を強めることができました。ただ歌舞伎をする場合はそのスケールが大きく、準備態勢をしっかり調えねばならず、やはり秋に、歌舞伎上演の準備を目的としたクラスを作り、教えて、春には直ぐ稽古には入れるようにしました。

さて狂言の稽古ですが、型に入って、型の味を活かす、と言う課題に慣れていない学生ですから、まず最初に、教えられたことを、教えられた通りに、理屈無しにやってみると言う態度を作り上げることから始めました。そのため

に、最初の一週間はスリ足で歩くこと、それに小舞の「花の袖」を日本語で謡い、舞うことを勉強させました。この基礎訓練は、後で狂言そのものの稽古に入った後でも、必要に応じて継続し、姿勢の崩れるのを直したり、発声の矯正、セリフのリズムを感じさせるのに、度々使いました。

この「花の袖」を日本語で謡わせるために、五線譜ではなく、四線譜の音符を作り、それにローマ字で歌詞を加えて、楽譜にして使いました。五つの音階は、low（低音）、medium（中音）、medium-high(中音高め)、high(高音)、high-high（高音高め）となります。この場合、最初の二行には、低音がなく、後の二行には、高音がないので、四線譜で事足りました。ローマ字の謡の下には、動きを示し、その下には、謡の言葉の意味を英語で付け加えてあります。これが大変便利で、一九六九年以来ずっと使っておりますが、七四年に又、四郎師に教えて頂いたときに、この表を一部差し上げたのですが、後で四郎師が同じような方法で、日本語の謡いをＮＨＫ趣味百科「仕舞入門」でお使いになっているのに気が付いて、面映ゆい思いをしました。本稿末尾に、私が工夫して作ったものをのせていただきます。

次の二週間に、セリフや動きを付けました。これは一つ一つの狂言に分けて稽古するので、時間が掛かりました。特に狂言独特のセリフの抑揚や、リズムを、英語に移すことを目指したので、文字通り口移しに、日本語のセリフをテープ・レコーダーで聞かせ、私の狂言的抑揚をつけた英語のセリフを聞かせて、それを学生に言わせるという過程をとりました。このセリフの様式化は、狂言の動きの様式化と相まって、観客にも好印象を残しました。多少分かり難いとか、奇妙な感じを与えたのは当然でしたが、英語を狂言化する事で、狂言の格調を多少なりとも維持できたと思います。

後の三週間でセリフや動きを定着し、最後の一週間半で仕上げをし、衣裳にも慣れさせました。合計七週間半の稽古期間を取り、日曜日を除いて毎晩稽古をしたので、時間的には十分な準備ができました。

舞台は演劇科の使える二つの劇場の、実験劇場と呼ばれる小さい方（観客席一二〇）を使いました。ここでは、舞

台が客席を三方から囲むようになっているのですが、正面に舞台をとり、橋懸は舞台奥に、真横につけました。舞台の奥行きが充分でなかったので、橋懸がその幅だけ、舞台に食い込んだ形になり、また橋懸そのものも、二の松を置くだけの長さしか取れないと言った、不充分なものになってしまいました。背景には、東京の飯田橋を入った、昔の観世会館の鏡板を飾った松を模写したものを下げ、一メートル位の短めの柱を、舞台の四方に立てました。

この舞台の作り方が、理想と現実の折衷案の第一とすれば、以下、第二、第三と譲歩せざるを得ない、幾つかの問題点が出てきました。米国人が床に座れ慣れないのは当然で、彼等を長時間座らせることの難しさから、後見の使用を限り、ただ「附子」のみに用い、それも、葛桶を主に渡したらすぐ退場し、この狂言の終わりで皆が退場してから、又改めて、葛桶を取りに出るという、略式の形を作りだす結果になりました。少しおかしかったのは、その後見が出ると、観客は、未だ劇が続いていると思って、それが終わるまで座っている結果になりました。

他には、女子学生の参加を認め、「鈍太郎」の女房と妾は、本物の女性を使い、女房を演じた学生が、最後の手車を作って鈍太郎が乗るのをまつところで、長時間、中腰の状態でいられないとのことで、途中で女性二人が正座して待つということをさせました。

その他の点では、学生も協力的で、大きな問題はありませんでしたが、余り型にはめてしまうのも苦しいかと思い、表情などは、多少自由になることを許しました。特に「附子」の太郎冠者と次郎冠者は、表情が豊かで、この自由さを大いに活用していました。これは、リアリズムとの妥協と言うべきかもしれません。

ちょっと変わったところでは、「附子」と「鈍太郎」は英語で上演し、一人一役で、計六名の米人学生を使ったわけですが、その中間に演じた「鎌腹」は、狂言を本当の姿に近い形で上演し、他のものと比較して貰う意味で、日本語で演じ、仕手の太郎を私がやり、アトの女房と小アトの某は、この大学に留学中の日本人男子学生に協力してもらいました。二人とも舞台に出るのは初めてで、充分なことはできなかったかも知れませんが、目的を果たすためには、

有意義な仕事をしてくれました。観客は、男の演ずる女を、女性が演ずる女と比較することが出来たわけで、男の演ずる女の淡泊な味に、共鳴している者も多かったようです。

英語版のテキストは、「附子」がリチャード・マッキノンの訳したもので、「鈍太郎」は坂西志保が訳したものに、私が手をいれて使いました。狂言の原本は、総て野村家が使っているものによりました。他の人が訳したものを使う場合でも、狂言なり、能なり、それぞれの抑揚のあるセリフ廻しを、出来るだけ忠実に反映できるような、単語なり、文の構成が必要ですので、どうしてもあちこち自分なりに直すことになります。上演を予定してなされた訳と、只、読み物として出版されたものは、どうしても微妙な差が出ます。そこが面白くもあり、手が掛かるところです。

衣裳の半分以上は、野村家と関係のある、能衣裳専門の鎌倉の佐々木能衣裳店で作ってもらいましたが、きちんと作られた物のよさは、はっきりと伝えられたようで、新聞の評にも、その点が指摘されていました。この店では，三回作ってもらいましたが、毎回、約＄一五〇〇位の予算で注文して、一回毎に作られる物の数が減って、ドルと円の交換率が変わっていくのを、痛感させられました。

狂言に慣れていない観客を、先ず「附子」という、大変上手く作られている狂言で引きつけ、「鎌腹」で本場の味(?)を提供し、「鈍太郎」で締め括るという作戦も効を奏したようで、慣れるに従って、観客の反応も自由になり、ある晩には、二人の女の手車に乗って退場する鈍太郎を見て、彼女達に同情した年輩の女性が、「鈍太郎が舞台のそでで、熱いポテトのように落とされるに違いない」と大声でいい、観客の笑いを誘っていました。

四角張って、生真面目な面だけ強調されやすい日本人にも、それなりのヒュウモアがあると言うことを紹介する意味でも、狂言は大変効果的ですが、こちらの観客や、演劇人にとっては、様式化された表現の美とその効果と言う意味でも、大いに興味を起こさせるものを持っていると思います。従って，これを初めとし、後何回か、狂言の上演に努めました。それについては又後で、述べさせて貰います。

後になって考えてみますと、この公演の全体的な出来具合は、初めて何か新しいことを習った生徒が、一生懸命に、教わったことを生真面目に、堅くなって復習しているような感じの、全くゆとりのないもので、はずかしいようなものですが、この経験があって、後のものがもっと興味のあるものになる土台になったと思います。

2．一九七三年の歌舞伎「勧進帳」と舞踊「菖蒲浴衣」

「勧進帳」を、私自身が演出して上演するというような、大冒険的なことは、初めからそう計画したわけでなく、又五郎師に来ていただいて、演出を担当していただくという案が、不幸にして実現できず、止むを得ず、私がすべてをやることになってしまいました。大学の公演計画は、その前年にしか企画できません。勿論歌舞伎をやるについては、そのスケールの大きさから、当然私としても、狂言の終わった後からいろいろ上司や、話を通しておかなければならない人には話を付けておきました。一番大事なことは、大学の方では都合が付きかねる、又五郎師の旅費、お礼、滞在費など、必要経費の大部分を、日本交流基金から出していただくことで、そのために、一年前の基金募集締め切りに間に合わせるように、又五郎師の都合を確かめ、基金への応募を済ませ、大学の公演スケジュールに歌舞伎公演をのせてもらい、基金応募の結果を待つことになったのですが、あいにくと、又五郎師の東宝歌舞伎のスケジュールが先に決まってしまい、基金からの援助金が出ると言うことが分かった時限では、又五郎師は来られないと言うことになってしまいました。こちらに来ていただくということが、企画としては本決まりだったのに、東宝との兼ね合いを、私たちが希望していたような具合に、又五郎師に取り計らってもらえず、「行けないよ」の一言で、終わりになってしまいました。代わりに誰かを行かせるという話もあったのですが、その方が来ることに二の足を踏み、来られず、結局、私がそれであきらめてしまったら、この話はそれでおしまいと言うことになってしまうという状態でした。

私も、一応日本演劇の専門家ということで雇われているのに、私の先生が来られないから、私は出来ませんでは、

私の将来が思い計られます。そこで、一度前に見たことのある、第二次世界大戦中に、歌舞伎の大スターが揃っていて、当然黒白ですが、その大スター連中の総出で、「勧進帳」を映画にしたものがあり、それをニューヨークのJapan Society（日本協会）が持っていて、簡単に貸し出しできるのを思い出し、それでいたらぬところを勉強して、私が自分で演出する事にしたわけです。松本幸四郎の弁慶、市川猿之助の富樫に尾上梅幸の義経という、大豪華版の配役です。この十六ミリの映画を、私の八ミリの映写機で写しとり、又カメラでも、大事な場面は何枚もの写真に撮り、舞台がどの様に使われているか、役者がどの様に動いているか、セリフはどの様に言われているかなどテープに記録し、大事なところは総て、記録に取れるところはとりました。これが先ほど触れた、一対一の個人教授ではできないところを、しっかり埋めてくれることになりました。只、黒白映画だったので、衣裳の様子がはっきりせず、いろいろ雑誌「歌舞伎」に出ている、「勧進帳」のカラー写真を見たり、歌舞伎衣裳の本で研究したりして、補足しました。それでもやはり全部はっきりさせることが出来ず、後で、又五郎師に嫌みを言われたことがありました。

ジェームズ・ブランドンが「勧進帳」を一九六三年の春に、ミシガン州立大学で上演した折りには、「身替わり座禅」を同時に上演して、一晩の公演にふさわしい長さにしましたが、私の場合は、残念ながら、他に演出出来る歌舞伎劇がなく、六十分そこそこの長さしかない「勧進帳」だけの上演も何か能のない話で、どうしようかと迷い、今それをはっきりさせてくれる資料が無く、確信が持てませんが、多分又五郎師に相談し、ロス・アンジェリスに住む、三条勘弥という女性の日本舞踊の先生（確か二世の方と思います）を紹介して貰い、大学の休暇を利用して、一週間程の時間を取り、あちらに伺って、舞踊「菖蒲浴衣」を教えて貰いました。只二人位で踊るのではなく、もっと華やかに、七名くらいで踊れるような、然し余り難しくなく、私が教えられるようなものと言う注文をして、そのように振り付けして貰いました。又当然八ミリの映画に撮り、持って帰ってから猛勉強して、ものにしました。何か日本舞踊的な背景の幕が欲しいと思い、自分でデザインして、富士山が遠くに見え、池の畔に松があり、菖蒲が咲き、小舟

が浮いていると言った感じのドロップを作りました。衣裳は、白地に菖蒲の裾模様をつけた浴衣に、ブルーの帯をして、ブルーの蛇の目傘をもたせ、菖蒲模様の舞扇を使わせました。この十五分位の舞踊が、この歌舞伎のプログラムの幕開けを勤めました。

今だったらそうすることはないですが、その時はこちらの衣裳をする専門家がどのくらい出来るのかはっきりしないのに、新任の悲しさで、前からいる衣裳の専門家に私がいろいろ指導し、細かい注文をして、一緒に努力して何とか間に合わせることに同意して、日本に衣裳を注文するなどということはしないですませることにしました。これが後で後悔する原因になりました。例えば弁慶のはく例の大口ですが、どんな生地の物を選び、どのくらい丈夫な物に仕立てなければいけないかなど、私もよく分からず、その専門家と二人で生地を買いに行き、目立ての良さで買ってしまい、それで作った後で、余り長持ちしない生地であることが分かったりして、がっかりしました。「勧進帳」の公演が、私の教えている大学だけで終わらず、他のところに行って、同じ衣裳を使って、又公演するということがあったりして、この大口の生地の弱いのには泣かされました。

「勧進帳」には、能の謡いがかり的なところもありますが、何と言っても、長唄が中心ですから、それをどのようにするか、大きな決意がいるところでした。佐藤昌三がイリノイ大学でやった歌舞伎もので、長唄が役者の動きに連れて唄われる場面で、三味線の長唄をテープで流し、たった一人の語り手が、ただ朗々と英語で語るということをしているのを前に見て、何か余りに簡単にし過ぎて、折角の歌舞伎と長唄の関係が弱められ、簡単にされすぎていると、残念に思っていたので、私の場合には、そうはしないぞと、密かに覚悟していました。それでどうしたかといいますと、三味線のほうは、ハワイ大学のように、その方の専門家がいるわけではないので、これはテープにまかせることにして、唄い手のほうは、五人のグループを作り、かられを訓練しました。男性三人に女性二人と言う構成です。長唄連中に、女性を入れるというのもまた、こちらの事情ということですが、女性の声と、男の一人が高い声が出るの

で、場面によっては、この三人だけで高音のところを唄ってもらうということもしました。そうすることによって、かえって、例の長唄特有の高音部がきれいに出て、それはそれなりに上手く行ったと思っております。

後になって、長唄を勉強する機会がもてましたが、この時には、そうした経験は皆目なく、幸いこの市に、長唄を勉強したことのある、日本人の奥様がいて、その方から、手ほどきを受け、又日本音楽を専門にして有名な、ウイリアム・モーム と知り合うことがあり、彼の紹介で、長唄「勧進帳」の三味線文化譜を知ることになり、大いに助かりました。

「勧進帳」の訳本は、幸い、ジェームズ・ブランドンのものがあり、それによりましたが、多少私なりに手を入れました。セリフは勿論英語でしましたが、長唄の歌詞は、短い数行のもの以外は、総て日本語で唄わせました。役者の動きに関連する大事なところは、プログラムに英語の訳を乗せて、それを読んで貰うことでよしとしました。オペラを見ていて、言葉が分からなくても、その音楽的な感じがその場面の演劇的な表現を強めてくれるということを、ここでもそうなることを期待した次第です。これはそれなりに成功したと思います。

オペラとか、米国で特に好まれる、ミュージカル（音楽劇と言ったらいいでしょうか）を上演する場合、こちらでは普通、歌える俳優と劇的な役を担当する者との二種類の俳優を用意し、その連中を指導し、上演までもってゆく演出担当者は、演出、特に特別な演技を必要とする場合には、その道に詳しいコーチ、オーケストラの音楽を指導し、指揮するコンダクター、もしそれに歌を歌う歌手が必用ならそのためのコーチ、そして舞台装置をデザインするデザイナー、その制作過程を指導し監督するテクニカル・ヂレクター、同じように衣裳部門の世話をする衣裳のデザイナー、照明の担当者、音響効果の担当者、そして小道具といって、舞台に手でもって出る物を準備する小道具係りと言った人々が必要です。

私が「勧進帳」をした場合、私以外にこの歌舞伎がどういうものであるかを知っている人がいないわけですから、

衣裳、舞台装置、音響効果、小道具、照明、その人々に全部必要な情報を与え、こちらの希望するものを作ってもらうと言うわけです。長唄のほうは、ブランドンが既に自分がこの劇を上演したときに、日本で特別にそのために準備したテープを作っていたので、それを利用しました。上記したように、長唄は、私が指導した長唄連中が、テープの音楽に合わせて唄ったわけです。演技指導、演出は勿論私の独演で、誰に任せることもできないわけです。このスコープの大きさ、その仕事の複雑さ、一寸想像を絶します。全く私だけで良くここまでできたものです。

そのために、出来るだけその手伝いの出来るコースを作り、それを取る学生を動員して必要に応ずるようにしました。その最たるものは、衣裳のコースでした。一般学生が四名と大学院生が五名参加して、衣裳の教授と私の二人で指導し、歌舞伎衣裳の特徴から話を初め、すぐに実際に公演に必要な衣裳作りをしました。このクラスは、一九七二年の秋学期にやり、このクラスを取った一部の者は、更に春学期にも、特別に衣裳作りに従事してくれました。そのうちの一人は、カトリックの尼さんで、一人で工夫をしてくれて、「勧進帳」の主な役者のカツラを作ってくれました。

演技指導もしなければならないので、その方のクラスも作り、春の「勧進帳」に出演するためには、その一学期前の秋に、特別に作られたクラスをとらなければならないとして、希望する者全部がクラスを取れるように、クラスを週に三回、繰り返すようにして教えました。それでも全部で十九名の者が最後まで頑張って、「勧進帳」の動き、舞い、唄、セリフと勉強し、クラスの半ばに至ったところで、配役を発表し、上演準備の土台固めができました。

実際の稽古は二学期目の、七三年の春学期に入ってから、充分時間を取ってやりましたが、稽古は、「勧進帳」だけでなく、長唄の稽古、舞踊の稽古とある訳ですから、それを全部一人でやる私にとっては、全く死にものぐるいでした。なんとか衣裳もでき、こちらでいうドレス・リハーサル（舞台稽古）が始まる前に、又着付けの稽古もするわけで、これは家内や、知り合いの日本女性にも頼んで、大騒ぎで何とか片を付けました。富樫の方が四名のとも侍が

いて、弁慶の方は、義経に四天王の六名、長唄連中が五名、後見が三名に、つけ打ちが一人と、こちらだけで計二十名、舞踊の方が七名で、二十七名が初めて着物を着るわけで、これは大変です。その前に又メークアップもそれぞれ勉強させ、これも歌舞伎の様式化されたものをするわけで、一々私が細かいところを仕上げなければならないので、大分時間と手が掛かりました。能、狂言の場合は、メークアップがないだけでも、それだけ助かります。このカツラ作りをしてくれた尼さんの他にも、何人かここで特筆したい者がおります。

舞踊のリード・ダンサーは、ホノルルから勉強に来ていた、既に舞踊の経験のある三世の女子にやらせ、もう一人二世の奥さんもダンサーの一人になりました。長唄の方では、一人日本人の男性学生が参加してくれて、重宝でした。弁慶は大学院生で、前の学校で、日本演劇の手ほどきを受けていたので、なかなか勘も良く、延年の舞いなども余り問題なくものにしてくれて、助かりました。富樫もやはり、大学院の博士課程にいた者で、しっかりやってくれて、好一対をなしてくれました。もう一人、私の友人で、韓国の仮面劇を専門にしているソール大学の教授の教え子の一人、女子学生が、大学院生として丁度来たところで、この女性も、衣裳のクラスでがんばってくれ、舞踊のダンサーもした上に、「勧進帳」の舞台監督の仕事も引き受けてくれて、大活躍をしてくれました。

大変楽しい、予期してなかったハップニングは、ある日の公演で、見物の年輩の日本女性が、弁慶の大見得を切ったところで、真に適切に、「高島屋」とかなんとか、声を掛けてくれたことです。丁度私が後ろの方に座っているその何列前かでしてくれたので、それがよく見えました。後でお礼を言おうと思っていたのですが、終わると同時に、素早く出てしまわれて、お礼をいいそびれました。皆が何事かと振り返ってみたりしたので、はずかしかったのかと思いますが、このローレンスで見た、久しぶりの歌舞伎で、思わず声を掛けてしまったと言うところだと思います。

死にものぐるいでやってみた歌舞伎でしたが、これを又その翌年の春に、今度は、ミネソタ州のミネアポリスの南になる、ノースフィールドという町にある、Carlton（カールトン）College という、一般教養を専門とする、学生数

二千に足りない、小さい方の大学に呼ばれて、一学期を使って、同じプログラムで、公演しました。ここは、丁度私がキャンザス大学に職を得たときに、同時にこの学校に応募して、その演劇科の代表者に気にいられて、そちらに来るように誘われたのですが、日本演劇を中心として、アジア演劇を専門としようと望んでいた私が、それを断ってキャンザスにきてしまったにもかかわらず、元々日本演劇に興味のある方で、これを機にして良い友人になってくださり、ここに呼ばれて、歌舞伎の公演をすることになったわけです。この学校の学生は、大変できの良い選ばれた者達の集まった、評判の良い学校で、私にとっても、得難い経験ができたところでした。ここでの「勧進帳」の変わった話では、シカゴから来ていた黒人学生のできの良い者が、弁慶をすることになり、私としても珍しい経験をしました。

ちょっと歌舞伎の話が長くなって、申し訳ありませんが、この「勧進帳」と「菖蒲浴衣」の組み合わせを、もう一度していますので、その話しもここでやらせてください。それは、イズラエルの Tel-Aviv（テル・アビーブ）にある、テル・アビーブ大学でした一九七六年一月の公演でした。なぜ又私が、イズラエルに関係ができたのかということですが、丁度キャンザス大学で七三年に歌舞伎をしたときに、このテル・アビーブ大学から若い夫婦が大学院生として来ていて、私たちの大騒ぎ振りを見ていたわけで、その歌舞伎なるものを見て、そのいかにも変わった、然し魅力のある演劇様式を、自分の大学の方に報告していて、その後直ぐに、その大学の芸術学部の学部長が私たちの大学で、彼の専門のフランス文学を教えるために、ここに一学期間やってきて、私とも知り合いになり、テル・アビーブ大学でその歌舞伎なるものをやらないか、という話しになったわけです。

丁度私は日本交流基金から、日本古典演劇の研究のために援助金がもらえることになり、七四年の九月から七五年の八月まで、一家揃って東京で一年過ごしました。その時の研究内容については、次稿で又詳しく述べますが、ここでは、イズラエルで歌舞伎の演出をした話をさせてもらいます。家内が裁縫が出来るので、多分又五郎師の紹介で、松竹衣裳に週に一回、午前中だけ、舞台衣裳がどんな物であるかを勉強するために、衣裳の縫い直しの仕事に行って

もらいました。そんな関係で、ここの人たちとも知り合えて、そのテル・アビーブ大学の「勧進帳」のための、古衣裳を一揃い求めたのです。確か、$一五〇〇を大学から預かり、それで買えるだけの物を求めました。大体は揃ったのですが、弁慶の衣裳などは一寸傷みすぎていて、公演中に何回か破れ掛けたところを、縫い直す羽目になりました。然しこうして大部分の物を買って置いたので、後作らなければならない物が限られていて、余り余裕のない時間を上手く使って、何とか終わらせたわけです。ただ、イズラエル人も、大柄な人がいるので、富樫は問題がありませんでしたが、弁慶は、一寸衣裳がきつくて気の毒でした。ここの衣裳作りでは、又家内に一役買ってもらい、大学で借りてもらったソーイング・マシンを使い、私たちのアパートで、弁慶や四天王の大口や、段の縞になっている生地を縫って作り、其れを着物に仕立てたり、私は私で、白い浴衣に菖蒲の裾模様を一枚一枚塗る仕事をしたり、やれるだけのことはして、大学の衣裳部に手を貸しました。

米国と日本の場合、船便で物を送っても、一ヶ月で大体着くのですが、日本から送ったこの古衣裳とか、私たちの冬物の衣類が、イズラエルに着くのに、なんと三ヶ月以上もかかって、やっと届くという状態で、大変な心配をしました。それでも大学の関係者が皆協力的で、上演準備のための仕事は順調に進みました。

日本を九月の初めに一人で出て、台湾、タイ、インドネシア、バリ島、そしてインドと廻り、最後にニュー・デリーで、後から日本を出た家内と息子の二人と一緒になり、そこの見物を済ませてから、十月の初めにテル・アビーブに入りました。一月の公演まで三ヶ月ちょっとしかないわけで、時間的には大変きついことでしたが、この三年間で三回目の歌舞伎上演という仕事でしたから、何をするのにどのくらいの時間が掛かるかと言うことが、よく分かっていて、それでむやみにあわてることもなく、何とかやれたのだと思います。

イズラエルでは、大学に来る前に、男も女も、皆兵役に取られ、確か二年は勤めさせられたと思います。従って、学生が、米国的に見ると、皆大学院生のようで、慣れるまで時間が掛かりました。弁慶をやった学生は、戦車の操縦

をする将校で、公演が終わる前に軍に呼ばれて、兵役に戻らなければならないというわけで、其れでは困ると、大学にも口を利いて貰い、その招集を公演が終わるまでのばして貰いました。然し、公演が終わった翌日、かれはその呼び出しに応えて、大学を去りました。

一学期間しかいなかったのですが、見ていると、学部の他のグループの幾つかが公演をもっていましたが、そのいずれもが、人集めが上手くいかず、準備不足で、公演前の二日間ぐらいは、徹夜、徹夜の稽古で、大変な騒ぎでした。私たちの公演が大変な前評判を呼んで、この学部長先生が公演第一日目の席を、全部大学、演劇界の要人とか、日本大使館、米国大使館など政府関係者を招待して、三百人分ぐらいしかない席が総て埋まってしまい、その後の二回の公演日も券が瞬く間に捌けてしまい、劇の出演者の親、兄弟、友人達が見に来られないと言う状態で、これでは気の毒だからと、学部の人たちに相談し、最後の舞台稽古の日を一般公演にして、そうした出演者に関係した者だけを招待しました。学部の舞台のほうの係の若い先生の一人は、いつもの自分たちの舞台稽古がとても人に見せられるようなものでないことに言及して、私の案が、とても実現できまいと心配してくれましたが、私は大丈夫と自信をもって、そのようにしてしまいました。これが又大評判を呼んで、その日は、客席は満杯、通路も席のない者が座り込んで、足の踏み場もないと言う状態でした。公演が（最後の舞台稽古が）無事に終わって、お客さんを帰す前に何か特別なことをしてやりたいと思い、富樫の衣裳を、皆がいる前で、舞台で脱がせて、衣裳がどの様に作られ、着られているかを見せました。これが又喜ばれ、もう大変な騒ぎでした。学生達がすごく協力的でよくやってくれて、それなりの良いものが出来たと、満足しています。

それにしても、この隣国との争いに毎日明け暮れしているという、このイズラエルの国で、初めて自分たちの手で作られる歌舞伎の上演を、私が手伝うと言う仕事をしている過程で、富樫の、弁慶や義経に示した理解と同情の念が、心あるイズラエル人に、パレスチニア人との対立を取り扱う政治的に大変難しい問題で、彼等の置かれた立場に、あ

る種のもっと人道的に暖かい、もっと個人化された、人間としてどのようにして正しくあるべきかと言う問題に、ある見方を提供したように取った人もいて、「勧進帳」のもっている政治的な意味が浮き彫りにされて、今日の日本人には余り感じられない意義を、改めて感じさせられました。こんな感慨を持たされたのも、このイズラエルと言う国で「勧進帳」をやるという、非常に珍しい経験をしたことによるといえましょう。

米国では勿論英語のセリフでやり、長唄は日本語で唄ったわけですが、ここではそうもいかず、日本語と英語ができる、大学の、日本音楽を専門にしていて、日本女性を妻にしている　エプスタイン先生の協力を得て、ヘブライ語の台本を作りました。私の仕事は、この先生と、英語の良くできるもう一人の女性の先生とに参加して貰い、英語で私が歌舞伎の調子でセリフを言い、それを今度は、他の二人がヘブライ語でやってみて、それに又私の方で、だめ押しをするとか、彼等がそうするとか、何時間もかかって、どの様に言うかをきめ、其れをテープに納めました。稽古の時に、このテープを聴かせて、セリフを言わせ、私が思ったようにいかない場合は、私が又ヘブライ語でやって見せたりして、いや大変な時間の掛かる過程でした。私は勿論ヘブライ語は全然できません。でも、他には特に変わったこともなく、総て順調に運べました。

其れでもこうして毎日、ヘブライ語を聞く生活をしていて、米国に帰る前に、ヨーロッパをちょっと覗いてみたいと思い、家内と子供達は、一足先にカナダのトロントにいる、家内の兄の所に帰し、私だけ一人で十日間、ギリシャのアテネ、パリとロンドンを廻りました。ロンドンの劇場で、後ろの席の夫婦がヘブライ語でしゃべっているのを聞き、つい懐かしくなって、終わって出るときに、「シャローム」(こんにちは)と挨拶をして、二人をびっくりさせたりしました。

私が行く確か二年ほど前に、イズラエルの国際空港で日本の赤軍の一人が、機関銃を乱射し、何十人も殺傷したことがあり、私が訪問していた頃でも、ゆったり、のんびりした雰囲気は余りありませんでしたが、其れでも、今に比

べれば、もっとゆるやかだったといえましょう。ジェルーサルムにしても、どこを歩いても、歴史的に有名で大事なところが幾つもあり、真に得難い貴重な経験をしました。

日本の大使館の人たちは、聞いたこともない者がやってきて、歌舞伎の「勧進帳」をすると聞いて、びっくりしたようでしたが、終わってから、安心したように、上出来でした的なことをいわれて、一応面目をほどこしました。

今回の稿では、「勧進帳」と「菖蒲浴衣」を三回やったので、歌舞伎の話が長くなりましたが、後は、能狂言の話しになりますので、次号では本論に戻って、私の経験を皆様の興味のあるところに絞って記すことになりますので、宜しく、お願いします。

（米国キャンザス大学名誉教授）

For Life Exercise

For Line Exercise
from Kabuki play, The Subscription List
A.T.Tsubaki

KANJINCHO (Brandon P. 23.)

YOSHITSUNE: Now Benkei.

Since the roads ahead are blocked by the barriers, thus,

I know now, I shall never reach our destination in the North.

I have decided that I shall take my own life.

But I must consider your wishes, too,

As I did in disguising myself a common porter.

Explain your plans for this crucial moment.

KAMEI: My Lord,

Why do I carry this sword on me?

When shall it be painted with blood?

Now is the crucial moment of My Lord's life.

KATAOKA: Let us resolve right now!

Cutting down the soldiers of the barrier,

We should dare to fight our way through the gate.

SURUGA: To show our deep gratitude to you here and now

We must, My Lord . . .

THREE RETAINERS: We must break through!

BENKEI: You, sirs. Wait a moment!

A crisis is no time for rash action.

Even if we fight and break through this barrier,

The news will travel ahead to new stations,

Informing them of our presence,

And making our passage more difficult.

My Lord, I beg you,

Pull your hat low over your eyes

And make a pretense of being exhausted.

If you will but follow behind us

Far in our rear,

Surely no one will suspect

Who My Lordship is.

YOSHITSUNE: You plan well, Benkei. Now, all of you,

We shall do exactly as Benkei says.

FOUR RETAINERS: As Our Lord commands.

TOBEYAMA.SHINJU

OSOME: Ah, that's right.

I am the only one who knows this.

It is lucky no one else is watching. Now, quickly,

leave here for my sake.

BENKEI: Oh, Gods and Bodhisattvas of Japan, I call upon you to witness the words I most reverently speak! I bow before you! I speak to you with utmost respect.

Hana no Sode 花の袖 (小舞 KOMAI)

A.T.T.

H-h
H a wa re hi to so de ni
M-h a
M e o e da o o i ha na no i

(left n right) what a pity! (roll n forward) one piece of twig (fan under the sleeve) cherry blossoms placed upon

H-h
H tsu ki o ni
M-h mo
M ta o ri te o mo to

(hands down) a sleeve after taken off a tree. (fan as a mirror) (reverse) The full moon in the sky

M-h
M na ga me ba ya no no zo mi wa no ko re ri
L o i

(looks up DSR pillar) I look up. (turn around to left) My wish lingers

M-h
M ru no no zo mi no ko re e ri
L ko no ha o

(straight to the UC) (left n right) (step back) (sit down) ...ish lingers (for them to stay longer).